JICA 草の根パートナー事業『ベトナム中部・自然災害常襲地での暮らしと安全の向上』

京都大学大学院　地球環境学堂　田中樹

はじめに：アジア地域では、経済発展が進む一方で、都市域への人口集中、農村域での過疎化、慢性的な自然災害の発生、地域資源や生態環境の劣化、経済格差と貧困層の増大などにより、環境保全力の低下や災害対処力の脆弱化が起こっている。加えて、次世代に継承すべき伝統文化や在来の知識・経験・技術が徐々に消え、本来、地域社会が持っていた復元力（社会・生態学的なレジリアンス）が失われつつある。また、幾つかはかつての紛争地域あるいは激甚災害の被災地域でもあり、復興途上にある地域も少なくない。このような状況にあって、わが国には、国内のみならずアジア地域の環境保全や防災に関し相応の役割が求められており、多様な地域性や住民ニーズを反映した具体的で実効ある地域支援のあり方を示すことが急務である。

京大地球環アジアプラットフォーム：京大地球環は、地球環境学研究の推進と環境マネジメント人材の養成を目的に平成 14 年に設立された。「環境マネジメント」を専攻名に持つ国内唯一の大学院として、文理融合を意図する多岐にわたる分野により構成され、「暮らしと環境」の多様な局面を包括する知識・技術・経験則の体系化とそれを軸とする教育（人材育成）、調査研究、社会貢献に取り組んでいる。平成 17 年には、国際協働の一環として海外教育研究拠点を設置し、「地球環アジアプラットフォーム事業（参照：http://www.ges.kyoto-u.ac.jp/asia/index.html）」を開始した。京大地球環の海外拠点は、南北の『伝統の回廊』と東西の『経済の回廊』が交差するベトナム中部（フエ市）に位置している。【註：ベトナムのチュオンソン山脈は、多様な文化や伝統性を持つ山岳少数民族の居住地であり、ベトナム・ラオス・カンボジアと照葉樹林文化複合の起源地とされる中国雲南地域をつなぐ『伝統の回廊』とみなされる。また、最近開通したタイ東北部とベトナム中部の南シナ海を結ぶアジアハイウエイは、インドシナ地域内陸部の経済を活性化させる『経済の回廊』と呼ばれる。】現在、JICA やアジア開発銀行からの協力を得て、ベトナム中部を中心に、地域活性化・環境保全・地域防災・環境教育・伝統文化の復興・自然資源管理・都市衛生と廃棄物処理・住民参加型アプローチなど多岐に亘る社会貢献活動に取り組んでいる。また、研究面では科研費による『自然災害常襲地での地域復元力向上』に関する学術調査、教育面では、大学院生のインターンシップ研修や学部生の国際交流科目（海外臨地研修）、学生招へい交流などを連動させ、「環境マネジメント」の担い手人材の育成を進めている。平成 18 年には、JICA 草の根パートナー事業『ベトナム中部・自然災害常襲地での暮らしと安全の向上支援（参照：http://www.jica.go.jp/partner/kusanone/photogallery/detail/vie_03.html）』を開始し、山岳少数民族や水上生活民、老人世帯など社会的弱者層を意識した地域支援に取り組んでいる。同時に、従来の「技術移転型」に留まらない「大学による国際協力あり方」を探っている。

取り組みへの課題と提言：専門分野の細分化が進み、学際的かつ包括的な地域支援に関わりうる人材の不足が指摘されている。協力を実施する側のエンパワーメントこそが重要な課題であると考える。大学スタッフを協力案件のマネージャとして派遣し、「現場→大学→現場・・・」の数年間ごとのサイクルを通じて、国際協力の実践、協力現場での学生・大学院生の長期フィールド研修、大学での教育・研究への反映とを有機的に連動させる仕組みの確立が望まれる。

2007年10月29日　名古屋大学ICCAE・第8回オープンフォーラム

大学と国際協力機関との組織連携の強化 ―大学国際化戦略の一環として―

事例報告：JICA草の根パートナー事業

ベトナム中部・自然災害常襲地での暮らしと安全の向上支援

京都大学　地球環境学堂
田中 樹

本日の話題

1. はじめに（私たちが直面する種々の課題）
2. 京大地球環境学堂アジアプラットフォーム
3. JICA草の根パートナー事業の経験から
4. 大学と国際協力：取り組みへの課題と提言

1. はじめに

私たちが直面する種々の課題

都市域への人口集中、農村域での過疎化、慢性化する自然災害、地域資源や生態環境の劣化、経済格差と貧困層の増大、環境保全力の低下、災害対処力の脆弱化、次世代に継承すべき伝統文化や在来知の消失、地域復元力（社会・生態学的なレジリアンス）の喪失、紛争や激甚災害からの復興　・・・・・・

わが国には、国内のみならずアジア地域の環境、暮らしと安全の向上に相応の役割が求められている

多様な地域性や住民ニーズを反映した具体的で実効ある地域支援のあり方を示すことが急務である

包括的な地域支援アプローチ を目指す

トップダウン型

活動、構想、実施主体 ....

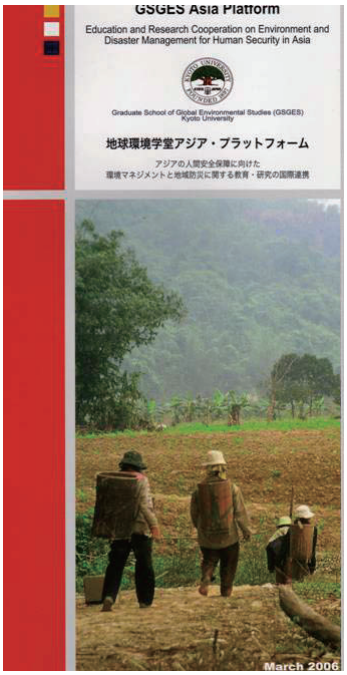
一方向的
- 問題発掘と解決
- 定番メニュー
- 「教える（研修、教育）」
- 外部者が主導

地域社会（村落、人々）

ボトムアップ型

双方向的
- 包括的な取り組み
- 地域住民が主導
- 「学びあう」
- 複数のオプション
- 長所を活かす

地域住民、専門家、研究者、NGO、行政（役人）など



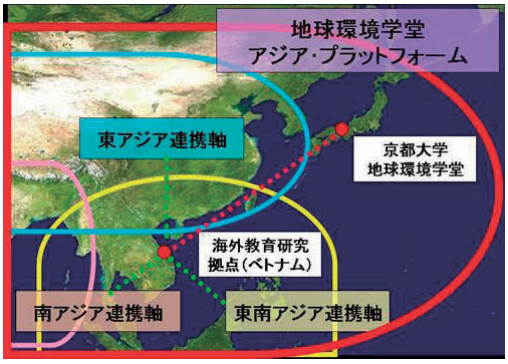
2. 地球環境学堂 アジア・プラットフォーム

アジアの人間安全保障に向けた環境マネジメントと地域防災に関する教育・研究の国際連携

地球環境学堂アジア・プラットフォーム

社会的ニーズ・課題

- アジア地域での「暮らしと安全」の向上
- 担い手となるコア人材の育成
- 大学による国際貢献



＊プラットフォーム：誰もが集うことのできる「場」と「機会」

活動内容

調査・研究
「環境マネジメント学」の体系化
地域支援アプローチの提案

教育・人材育成
インターン研修（大学院、博士・修士）
国際交流科目（学部生）

社会貢献
国際協力、地域支援、担い手の育成

期待される成果

- 「環境マネジメント」における高度な専門性をもつ人材（コア人材）を輩出する
- アジアでの地域活性化、環境保全、防災力の向上などへの取り組みに貢献する
- アジアにおける環境マネジメント地域連携ネットワークが形成される
- 上記の成果が国内外に還元される

3. JICA草の根パートナー事業の経験から

JICA草の根パートナー事業

ベトナム中部・自然災害常襲地での暮らしと安全の向上支援

（＊地球環の提案による事業／大学院規模の取り組みは日本初）

Chương trình Đối tác Phát triển:

Nâng cao Năng lực thích ứng và Sinh kế bền vững cho cộng đồng nhằm đối phó với Thảm họa tự nhiên ở miền Trung Việt nam

Tháng 3/2007

Đại học Huế
Trường Đại học Nông Lâm

Đại học Kyoto
Trường Sau đại học về Nghiên cứu môi trường toàn cầu

JICA
Cơ quan hợp tác quốc tế Nhật Bản

Liên hệ:
Văn phòng Đại học Kyoto tại Huế
c/o Trường Đại học Nông Lâm, Đại học Huế
102 Phùng Hưng, Huế, Việt Nam
ĐT/Fax: +84-54-630065
Email: hue.kyoto@gmail.com
Attn: Ms.Akiko Itoyas/Dr. Lê Văn An

On-going Activities

Basic studies and activities are implemented in each site. Expansion, improvement, and evaluation of the activities will be considered based on further discussion with the communities and findings from scientific research.

Mountain - Hong Ha Commune, A Luoi District

Community house: Traditional culture learning and information exchange.
"Sunday Green": Environmental learning for children
Traditional textile: Revival of traditional skill by women's group.
Animal production and landscape management: Integration of animal husbandry and fodder cultivation.
Introduction of new crops (vanilla etc.): Diversification of resource utilization and household income.
Development of local market: Promoting commodity and information exchange.

Plain - Huong Van Commune, Huong Tra District

Framework of Cooperative: For sustainable livelihood with specific focus on animal production.
Community Resource Center: Learning and knowledge hub of the community.
Training of trainers: Animal husbandry, crop production, market system, disaster and environmental management.
Community-based safer village plans: To reduce the impact of natural disasters.
Building information sharing system: Bulletin board, poster, leaflet and radio broadcast.
Pig-raising and bio-gas system: Contributing to economic, environmental and social security.

Lagoon - Thuan An Town, Phu Vang District and Huong Phong Commune, Huong Tra District

"Lagoon Ranger Kids": Continuous water quality monitoring by school-children.
Basic studies: Socio - economic characteristics and risk management of aqua - agriculture community.

Các hoạt động đang triển khai

Các nghiên cứu cơ bản và các hoạt động đang được triển khai tại mỗi điểm. Mở rộng, cải tiến và đánh giá các hoạt động sẽ được triển khai dựa vào những thảo luận với cộng đồng và các kết quả từ các nghiên cứu khoa học.

Ở miền núi - Xã Hồng Hạ, huyện A Lưới

Nhà cộng đồng: Nơi học hỏi về văn hóa truyền thống và trao đổi thông tin.
"Ngày chủ nhật xanh": Học về môi trường cho trẻ em
Dệt thổ cẩm: Phục hồi kỹ năng truyền thống của nhóm phụ nữ.
Chăn nuôi gia súc và quản lý cảnh quan: Kết hợp chăn nuôi gia súc và phát triển cây thức ăn.
Thử nghiệm giống cây trồng mới (cây vanilla, ...): Đa dạng nguồn sử dụng và tăng thu nhập cho hộ gia đình.
Phát triển chợ địa phương: Thúc đẩy sản xuất hàng hóa và trao đổi thông tin thị trường.

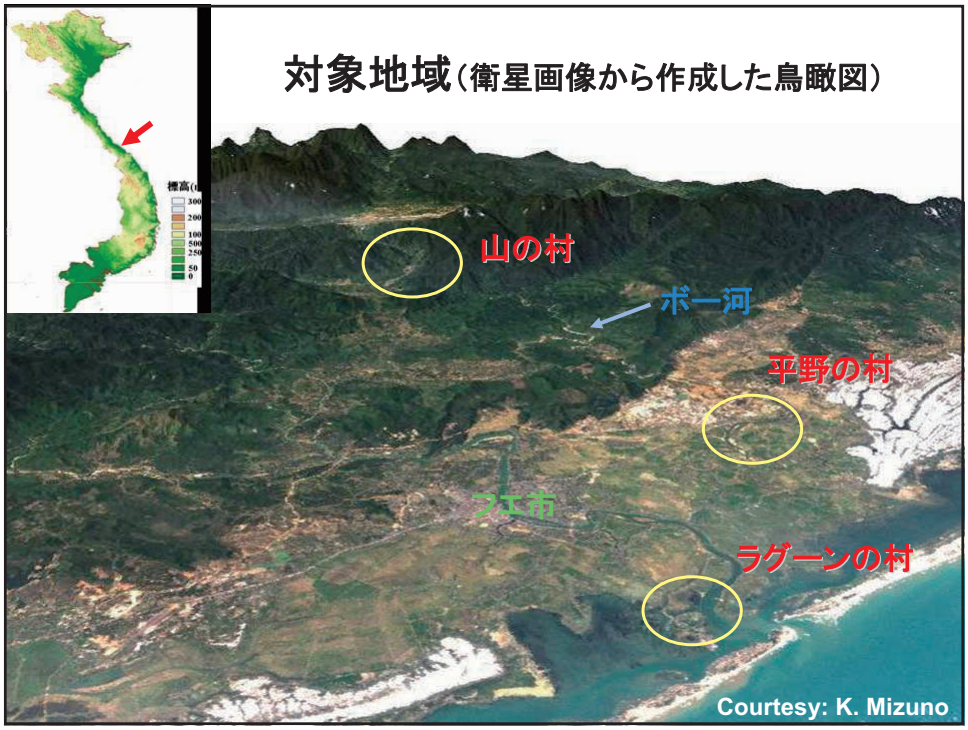
Ở Đồng bằng - Xã Hương Văn, huyện Hương Trà

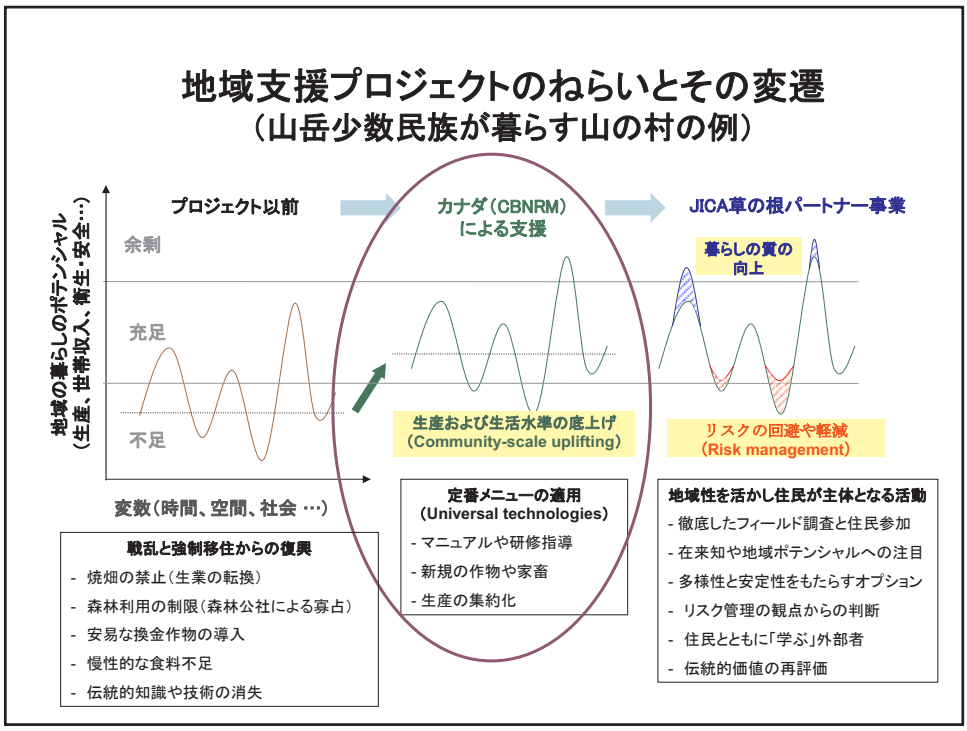
Nhóm hợp tác: Nhằm ổn định sinh kế dựa vào hoạt động phát triển chăn nuôi.
Trung tâm thông tin cộng đồng: Là nơi học hỏi và chia sẻ kiến thức cho cộng đồng.
Đào tạo người nồng cốt: Về chăn nuôi, trồng trọt, thị trường, quản lý thảm họa.
Kế hoạch an toàn dựa vào cộng đồng: Nhằm giảm ảnh hưởng của các thảm họa tự nhiên.
Hệ thống chia sẻ thông tin: Bảng thông báo, tờ rơi, áp phích, loa truyền thanh.
Nuôi lợn kết hợp bio-gas: Tạo ra thu nhập, an toàn về môi trường và xã hội.

Ở Đầm phá - Thị trấn Thuận An, huyện Phú Vang và xã Hương Phong, huyện Hương Trà

"Nhóm trẻ em bảo vệ môi trường đầm phá": Giám sát chất lượng nguồn nước.
Các nghiên cứu cơ bản: Đặc điểm kinh tế - xã hội và quản lý nuôi trồng thủy sản ở cộng đồng.

事業の目的：自然災害常襲地において、地域住民による環境・防災教育や総合的地域防災の取り組み体制を構築し、その実践を通じて暮らしと安全の向上をはかる


対象地域（衛星画像から作成した鳥瞰図）
山の村
ボー河
平野の村
フエ市
ラグーンの村
Courtesy: K. Mizuno


地域支援プロジェクトのねらいとその変遷
（山岳少数民族が暮らす山の村の例）
地域の暮らしのポテンシャル
（生産、世帯収入、衛生・安全…）
プロジェクト以前
カナダ（CBNRM）
による支援
JICA草の根パートナー事業
余剰
充足
不足
暮らしの質の
向上
生産および生活水準の底上げ
（Community-scale uplifting）
リスクの回避や軽減
（Risk management）
変数（時間、空間、社会 …）
戦乱と強制移住からの復興
- 焼畑の禁止（生業の転換）
- 森林利用の制限（森林公社による寡占）
- 安易な換金作物の導入
- 慢性的な食料不足
- 伝統的知識や技術の消失
定番メニューの適用
（Universal technologies）
- マニュアルや研修指導
- 新規の作物や家畜
- 生産の集約化
地域性を活かし住民が主体となる活動
- 徹底したフィールド調査と住民参加
- 在来知や地域ポテンシャルへの注目
- 多様性と安定性をもたらすオプション
- リスク管理の観点からの判断
- 住民とともに「学ぶ」外部者
- 伝統的価値の再評価

CBNRMプロ*の成果と課題

（*Community-Based Natural Resources Management／カナダによる支援）

・定番メニューの紹介と実践

研修やワークショップ

↓

・知識や技術の移転
・一方で、「外部依存」や「主体者意識」の欠如の懸念

VAC農法

↓

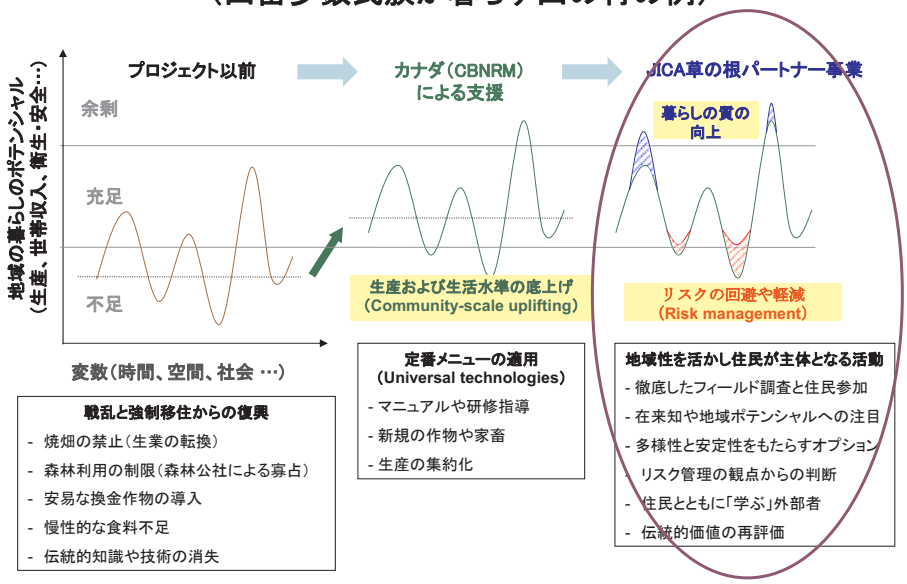
・土地利用の多様化
・世帯収入源
・環境保全効果
・リスク分散

高収量品種の導入

↓

・自給率の向上
・世帯収入源
・多様性の減少
・リスクの増大

地域支援プロジェクトのねらいとその変遷
（山岳少数民族が暮らす山の村の例）



JICA草の根パートナー事業の基本姿勢と活動

基本姿勢

1. 地域（あるいはフィールド）を理解する
2. 包括的なアプローチ
3. 住民参加と地域ポテンシャルを活かす
4. 大学（研究機関）による地域支援

基本となる活動

1. 地域住民が参加する調査活動
2. 地域住民が参加するトライアル
3. 地域住民と外部者による「学び」
4. 地域住民が主導するセミナーや研修
5. 連携ネットワークの構築

進行中の活動（今後増える見込み）

ラグーンの村

環境教育（Lagoon Ranger Kids）
住民参加型調査（地域特性と住民ニーズの把握）

平野の村

女性グループによる養豚活動
豚ぷんを利用したバイオガス（衛生環境の改善）
環境・防災教育
防災掲示板の設置と運用
地域人材の育成（Training of Trainers）

山の村

伝統建築様式のコミュニティハウスつくり
環境教育（Sunday Green）
女性による伝統的織物技術の復興
ヤギの飼育と多様性のある森つくり
バニラ栽培（世帯収入源、弱者世帯の支援）

進行中の活動（今後増える見込み）

ラグーンの村
- 環境教育（Lagoon Ranger Kids）
- 住民参加型調査（地域特性と住民ニーズ）

平野の村
- 女性グループによる養豚活動
- 豚ぷんを利用したバイオガス（衛生環境の改善）
- 環境・防災教育
- 防災掲示板の設置と運用
- 地域人材の育成（Training of Trainers）

山の村
- 伝統建築様式のコミュニティハウスつくり
- 環境教育（Sunday Green）
- 女性による伝統的織物技術の復興
- ヤギの飼育と多様性のある森つくり
- バニラ栽培（世帯収入源、弱者世帯の支援）

各地域をどうつなぐか
↓
こども交流

大学が国際協力に関わることの意義
（特に草の根レベルでの取り組みにおいて）

大学だからできること（従来の「技術移転型」に留まらず）

価値観や認識の発信：新しい視点や方向性の提案●、一般認識の修正、発想の転換●、伝統性や在来知の再評価●、など

技術や手法の開発：新しい技術や手法の発案・検証・提案、従来技術の改良、「人」と技術をつなぐインターフェースの開発、個別技術・経験・知識の包括と体系化

人材育成：国際協力に関わる実務者（アドミニストレータ、専門家、研究者）や地域の担い手人材（技術者、ファシリテータ、リーダー）の育成など

継続的な取り組み：上記は大学の基本的ミッションであり「時限」がない

● 女性グループによる養豚活動、● ヤギの飼育と多様性のある森つくり、
● 女性による伝統的織物技術の復興 、● 地域を結ぶ子供交流

● 女性グループによる養豚活動

背景と取り組み

地域ポテンシャル：養豚
洪水常襲地：豚の価格の下落
ニーズ：世帯収入の向上
↓
発想の転換：洪水を回避すれば
高値で豚を販売できる
↓
対応策：避難プラットフォーム

活動内容

・養豚組合
・バイオガス（豚ぷん処理）
・マイクロクレジット

留意点：すでにある生業活動をベースにする、
新規の生業オプションの導入に頼らない

● ヤギの飼育と多様性のある森つくり

背景

アカシアの一斉植栽と皆伐
森林利用の制限（公社の寡占）
主要な世帯収入源

問題点

皆伐に伴う侵食や河川の荒廃
「森」の多様性や機能の喪失

↓ ヤギの飼育

・世帯収入源
・発想の転換（間接的効果をねらう）
・アカシアの間引きと飼料作物の植栽（→構成種の多様化、侵食抑制など）
・山菜や野草の採取

● 女性による伝統的織物技術の復興

背景と経緯

1. 戦乱と強制定住による
   伝統技術継承の途絶
2. 民族的アイデンティティ
3. 次世代（自分の娘）への継承

↓ 女性有志からの提案

4. 「伝統的織物」の技術講習
   - お婆さんが先生
   - 女性グループの結成
   - 自主的な運営
   - 半年間の資金援助

＊少数民族研究、平和構築の研究へ
＊国際協力の新たな領域へ

余談：「伝統的織物」の活動はどこへ向かうか

直感的に思いつくのが・・・・

- 製品の販売
- フェア・トレーディング

↓

- 活動資金の獲得、世帯収入の向上

洋風の音楽でお遊戯（村の小学校にて）

環境教育への組み込み

- 伝統的な踊りや歌の継承
- 老人から子供へ（世代を継ぐ）

＊「お金」に優先する価値

「Self-confidence」から
「Self-esteem」へ

● 地域を結ぶ「こども交流」(準備中)

- 技術や経験の地域間交流(「山と平野と海」をむすぶ)
- 伝播媒体としての「こども交流」、「世代間交流」
- 自然発生的な地域間連携ネットワークの形成

4. 大学と国際協力:取り組みへの課題と提言

問題意識

対象地域や人々への「エンパワーメント」がよく言われるが、
外部者(協力する側)にその必要はないだろうか?

大学の現状と課題

- 専門教育の細分化と実践教育の不足
  → 包括的な技術や手法を生み出しにくい
  → 学際的かつ包括的取り組みへのフィールド人材の不足
- 教育や社会貢献への低い評価(研究偏重の傾向)
  → 「協力現場」を知り学生指導する教員の不足
  → 学生ニーズに応える体制が取りにくい
- 流動性に乏しい人事
  → 「研究」・「教育」・「実践活動」の連動性の断絶

提言：
「教育・研究・実践活動」が連動するプロジェクトとそれを支援する体制の整備

教員
- 協力現場：プロマネとして長期派遣（2～3年）、フィールド教育
- 大学：教育・研究へのフィールド経験の還流（3～5年）

大学院生（→いずれは「担い手」人材に）
長期フィールド研修、地域調査

大学、JICAなど
取り組み体制の整備（ポストの保全、ローテーション）、予算化、評価基準の見直し　・・・

組織の意思決定の多くは「前例」による、「前例」を作らなければ何も始まらない

ご静聴ありがとうございました

ご関心のある方はHPをご覧下さい

地球環境学堂アジアプラットフォーム＜www.ges.kyoto-.ac.jp/asia/index.html ＞

JICA草の根（当案件）＜www.jica.go.jp/partner/kusanone/photogallery/detail/vie_03.html＞

コンタクト：田中 樹 ＜e-mail: uerutnk@kais.kyoto-u.ac.jp＞

おまけ：自己紹介

土人（つちびと）

氏名：田中 樹
原産地：北海道　1960年産
専門分野：土壌学、農耕技術論
活動地域：アフリカ、インド、日本、
東南アジア（ベトナム）

活 動 紹 介

1. 西アフリカ内陸半乾燥地
サヘルの地域特性と人為-環境連関、
砂漠化とその対処、農民技術の再評価

2. 東・南部アフリカ
環境保全と生業活動の両立、
在来農耕システム、村落開発手法
社会・生態レジリエンス

3. 東南アジア（ベトナム中部）
ベトナムでの草の根パートナー事業
地球環境学堂「アジアプラットフォーム」

4. 日本国内
地域「活性化」支援、海外経験の還元、留学生支援

連絡先
京都大学地球環境学大学院
京都大学大学院農学研究科
uerutnk@kais.kyoto-u.ac.jp

発表者プロフィール

氏　名　　田中 樹（たなか　うえる）
現　職　　京都大学大学院　地球環境学堂（陸域生態系管理論分野）准教授
連絡先　　京都市左京区北白川追分町　京都大学　農学部国際交流室気付
Tel: 075-753-6299　　Fax: 075-753-6298
E-mail: uerutnk@kais.kyoto-u.ac.jp

学歴
京都大学大学院　農学研究科　博士課程中退

職歴/研究歴
土壌学および陸域生態系管理論を主たる専門とする。国内では、土壌クラストの形成機構に関する研究に従事。海外では、これまでに、インド亜大陸や東西アフリカの半乾燥熱帯圏における在来生業技術の評価、西アフリカ・サヘル地域での砂漠化メカニズムの解明と水平技術移転による対処法の検討、南部アフリカ農村での社会・生態レジリアンスの解明などに取り組んできた。国際協力との関わりでは、国際協力機構「タンザニア国・ソコイネ農業大学地域開発センタープロジェクト」での専門家経験がある。現在、所属先での教育・研究のかたわら同機構・草の根パートナー事業「ベトナム中部・自然災害常襲地での暮らしと安全の向上支援」でのプロジェクト・マネージャを務める。

JICAの草の根技術協力事業「ベトナム中部・自然災害常襲地での暮らしと安全向上支援」

田中　樹
京都大学大学院地球環境学堂准教授
塚本　政雄
京都大学国際交流課長

質疑応答

（浅沼）　京都大学国際交流課長の塚本さん、何か事務的なところでよろしいですか。どちらかというと現場に出ている教員の側からのご経験とご提案がありましたけれども、何かご質問等あれば。

（塚本）　本事業の実施に係る事務は、部局の事務部において担当しております。

（松本）　この草の根の事業に実際携わっている教員の数と、これを支援している事務方の体制について教えてください。

（田中）　連携先機関のフエ農林大学の参加者（パートナー）は15名。それから地球環境学堂の教員で、実際フィールドに入る教員は６名です。それから有期雇用研究員として、現地駐在員が１人います。合計７名です。事務方の方では、地球環境学堂の経理掛の掛長、総務・教務掛長にサポートしてもらっています。それと、地球環境学堂でアジアプラットフォーム事業を行なっている海外プロジェクト班では事務スタッフを１人雇っています。大体人数でいうと、京大・フエ農林大学あわせて25～28名ぐらいの体制プラス現地（対象地域）の人々ということでやっています。

（浅沼）　ほかに何かご質問ありませんか。大金先生。

（大金）　非常に興味深く拝聴しました。非常に共感する部分が多いのですが、やはり評価のところが非常に気になりました。先生の価値観でいう、お金に優先する価値というものの測り方を、恐らく定性的なものだと思うのですが、伝統的な価値とかそういったものの継承とおっしゃっていましたが、それは定性的なものなのでしょうかということと、それから大学の評価そのものも、評価基準の見直しをしなければいけないと。先生のやっている活動は非常に素晴らしいことだと思うのですが、であれば、大学の中でどういう評価の基準にするべきなのか、具体的に考えていらっしゃるのかを聞かせていただければと思います。

（田中）　難しい質問で、すみません、多分これには答えられないと思います。逃げる気はありませんけれども、私どものこのような活動に対して、逆に外部の方々から評価を考えてもらえませんかという立場です。お金に優先する価値というのは、言い過ぎかもしれませんが、最近グローバル化などという世界標準化が進む中で、本当は地域や民族の多様性こそが安定や豊かさを生むということに注目する必要があると私は思うのです。そのために、いわゆる経済の指標ではなくて、そ

れ以外の価値に対する評価があってもいいのではないかと、一般論としては思います。

では、具体的に何かというと、私どもの活動は模索段階にあります。草の根事業はあと２年ありますので、このご質問は宿題ということで、終了時に答えさせてください。

（浅沼）　ほかに。

（高間）　鹿児島大学から来ました高間と申します。２点あるのですが、プロジェクト形成ですね。これだけのプロジェクトをやるには、どの程度の形成があって、プロジェクトの中で調査を内在化している部分もあると思いますが、形成にかかる調査をどれくらいやられたのか。

それから、草の根の本質的なところがあると思うのですが、これが点から線へ、それから面へということでいくべきなのでしょうが、それが終了後、どういうふうな展開、今の話だと子供の交流が主だと言われていますが、あの地域だけでもだいぶ大きいと思いますが、その点いかがでしょうか。

（田中）　ご質問ありがとうございました。まずプロジェクトの形成の過程についてお話しさせていただきますと、私ども地球環境学堂というのは京都大学の中にありまして、社会、人文、工学、農学もろもろの、ありったけの分野からかき集めて作った、小さな小さな大学院です。そういう意味で、そういった傾向のある（多様性やフィールドワークに価値を置く）人材が集まったという背景が一つあります。

もう一つは、この案件を形成して実現するまでに、1度JICAのセレクションを落ちたのを差し引きますと、大体1年半で活動にこぎつけています。一つは大学の自前の予算で現地の状況調査をしました。

さらに、コアになっている参加メンバーがそれぞれ国際協力経験あるいは海外調査経験を持っていますので、その知恵と経験を寄せ集めたという要素があります。

さて、こういった経験をどうやって点から面にするかというのは、かなり難しい問題です。私どもは、ひたすら丁寧に仕事をするだけでして、ベトナム中部の３ヵ村をカバーするだけでも、先ほど言いましたように、30人近い人間を動かして事に当たっています。逆に言いますと、そのぐらいのことをしないと（それだけ多くの人数を割かないと）、本当の意味で地域の人々のニーズとか、状況に対応するような、しかもプロジェクトが終わったらお仕舞いというのではなくて、とにかく細々とでも持続するような活動はできないと思うのです。

小さな大学院がやれる仕事のレベルとしてはこれくらいです。ただ、点から面に移行するために、二つの作戦を考えています。一つは地域人材（対象地域の人々の中でも活動のコアになる人材）を養成していますので、彼らを通じての情報やノウハウの伝播が期待できます。要するに地域の人々の口コミなどによる古典的な技術移転の伝播を期待しています。

「点から面」への移行は、まさに今日のオープンフォーラムの課題でもありましょう。大学が参加するような草の根の案件、あるいは規模は小さいにしても、何らかのプロジェクトが複数立ちそれがこのフォーラムのような形でお互いに交流すれば、相乗効果が伴って、点から面にいくのかなという、ちょっと楽観的なことを考えています。答えになったどうか自信ありませんが。

（浅沼）　どうもありがとうございます。